令和４年度　【第12期】第３回長野県生涯学習審議会　議事録

日　時：　令和４年６月９日（木）13:30～15:30
場　所：　県立長野図書館　信州・学び創造ラボ　オンライン併用（ZOOM）
出席者：　西　一夫（会長）、秋葉　芳江、泉山　莉奈、伊藤　美知子、
関　正浩、樋口　正幸、深野　香代子、堀内　絹代、松田　晶弘、
毛受　芳高、森田　舞、柳澤　礼子　（12名）

１　開会

〇事務局（増尾課長補佐兼総務係長）

２　内堀教育長挨拶

皆さん、こんにちは。５月13日に県の教育長を拝命した内堀繁利でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

生涯学習審議会の委員の皆様におかれましては、御多用のところ審議会に御出席いただきまして、厚く御礼を申し上げます。本来であれば会場に伺うべきところですが、公務の都合上、オンラインで参加させていただいております。お許しいただければと思います。

当審議会では、本県の生涯学習、社会教育の振興の基本的な方向性について、初回、第２回と委員の皆様から非常にたくさんの有意義な御意見をいただきました。変化が激しく予想困難で、正解のない時代において、多様な個人と社会のウエルビーイングを実現していくためのヒントを多数いただいたと考えているところであります。

本日はこれらを踏まえ、会長を中心におまとめいただいた提言の骨子案について、意見交換がされるとお聞きしております。議論の内容をまた参考にさせていただきたいと考えているところであります。

今回もぜひ忌憚のない御意見をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

＜諸連絡＞
〇事務局（増尾課長補佐兼総務係長）
【会議成立の確認】
【配布資料の確認】
【審議会公開の確認】

３　会議事項

（1）審議の進め方

○西会長
　よろしくお願いいたします。２回の審議会がオンラインということで、その中で皆様から頂戴した意見などを基にして骨子案を作成しました。今日は提言に向けての取りまとめの基本的なラインを定めるということになります。たたき台ということですので、忌憚のない御意見を出していただいて、よりよいものへ仕上げていければと思いますので、御協力のほど、よろしくお願いいたします。
　それでは、議事に入ってまいりたいと思います。
　まず、本日の審議の進め方について、お諮りしたいと思います。進め方及び委員各位にお示ししている資料について、事務局からの説明をお願いしたいと思います。

○事務局（赤池生涯学習係長）
　【審議の進め方についての説明】
　【配布資料についての説明】

○西会長
　ありがとうございます。今、事務局から資料１、資料２の説明、さらに本日の議事の進行について御提案をいただいたところですが、議事の進行についてはいかがでしょうか。特に御異議ございませんでしょうか。
（異議なし）
　それでは、事務局の提案のとおりに進めてまいりたいと思います。
　まず、資料３－１から資料３－３にかけての骨子案について説明を申し上げたいと思います。
　資料３－１でございます。これまでの２回の議論の中で取りまとめてきたことを大きく幾つかのフェーズに分けてまとめた資料ということになります。
　「１　提言の趣旨」としては、近年の社会の変化を踏まえた本県の生涯学習・社会教育の振興の基本的な方向性や具体的な施策について提言するというのが、我々の最終目的ということになると思います。
　先ほどの資料にもございましたように、現状の認識がどういったものであったかについて、論点の抽出からさらに三つの形で整理をさせていただいております。
　（ア）が、より不確実で正解のない時代が到来している。これは皆様がある程度、御承知のことで実感なさっている部分も多いのではないかと思います。
　第２点が、人生100年時代、３ステージの人生からマルチステージへと、人生が大きく変化していく。「学ぶ」から「働く」、そしてその後という形のものだけではとどまらない、様々な人生の生き方が実際に起きてきているだろうということです。
　第３点目として、誰一人取り残されることのない社会の実現ということで、格差社会などと言われている中、そういったことが生じないように、県の中で生きていける人たち、県民の創造が重要になるだろうということが大きな柱になってまいります。
　これらを基にして、今回の骨子案として御提案したいのが、大きな理念としては、「すべての人が学び合い、共に変わり続ける“シン・生涯学習社会”」をつくっていこうということになっております。

この理念の中で、片仮名で「シン」と書いてあるのは、以下の三つのフェーズの中の三つの「シン」という漢字１字に込めるという形で提案として、片仮名の「シン」としてございます。

一つ目が、「真」の生涯学習の実現。２点目が、「新」しい学びの推進。そして三つ目が、「信」頼を紡ぐ、持続可能な地域社会の創造をという意味での人的な信頼性というものの確立ということになります。裏面を見ていただきますと、それぞれについての大まかな見通しを箇条書きにしております。これについては、また後から御意見をいただきたいと思います。

このことを資料３－２でおおよそ整理して概念図としてお示ししたものが、このような形で色刷りで三つの「シン」、それぞれの施策の方向性も含めてお示しした資料になっております。

どういうことがここで話題になっていくのかが一つ課題になりますし、この三つの「真」「新」「信」がどういう関係になるのか。実はそれぞれ意味を持っていると思いますが、この三つがどういう関係性を持っていけば一つの施策、あるいは県の施策への提言として現実味を持ってこれを動かせるかということについて、資料３－３にまとめてあります。

まず、新しい「新」ですが、これは技術的なリソースとくくってみました。ここで、何を使って何をつくって何を実現するのかという、一応①から③までボトムアップ式に、出していただいている内容を簡単にまとめてみました。最新テクノロジーを最大限活用して、いつでも、どこでも、誰でも学べる、そういったものをつくり出して何を実現するのかというと。日本一学びにアクセスしやすい長野県へという、学びということの実現へと向けていく。それが、恐らく本当の生涯をかけて学び続ける生涯学習の一つのきっかけになるだろうということで、矢印の上に向けてアップしてまいります。

信州の「信」でございますけれども、信頼を紡ぐということで、これは人的リソースというふうにまとめてみました。地域・個人の在り方、問い続ける力や関わり続ける力を育成することで、多様な関係性や社会的包摂関係での信頼関係をつくって持続可能な地域社会を実現するという形で、ボトムアップ式に地域や個人、それによって何を使ってどういったものを形成して、何を実現していくのかをイメージしてみました。

最終的に、この県民我々が、より幸せで充実したウェルビーイングのような形で生活できることを求めていくので、「真」の字を一番上に配した構造となっています。本来的にはもう少しこれは立体的になって、三つがそれぞれ相互の関係になったほうがいいと思いますが、一応、見やすくするために、平面的にはこういった書き方をしておきました。人と技術を生かすことで、マルチステージの人生を実現させる。生涯にわたって能力を身につけようとする意欲や興味、自己変容をそれで図っていくということです。

一方で、他者と自己、地域と関わることで学び続ける力、学び直しによる驚き、再認識という形で、ある程度、技術的リソースや人的リソースのようなものを踏まえて、真の生涯学習へということですが、これをつくった後、よくよく見直してみると、人的リソースと技術的リソースも相互の矢印がつかないと実現できないというところに気がつきました。そういった相互矢印の中で有効に活用しながら、最終的に「真」の生涯学習へというイメージがあると、どんな施策をすればこの部分が充実できるか、どういった活動を地域に求めていくことで、人的リソースを有効に活用できるかというところが、施策的なものに向

けて具体化できるのではないかと考えました。これは、あくまでもたたき台ですので、いや、もう少し違うのではないかという、その辺りの御意見もいただければ、今日はいいのではないかと思います。

私からの資料３に関わっての３種類の資料についての説明は以上でございます。

（2）「これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた提言（仮称）骨子（案）」について

意見交換

〇西会長

では、骨子案について意見交換に入ってまいりたいと思いますが、委員の皆様よろしいでしょうか。オンラインで御参加の方もよろしいでしょうか。

では、まず初めに、資料３－２が多分一番見やすいと思います。大きい資料で全体のイメージをつかみやすいと思うのですが、それか資料３－３を少し見ていただきながら、全体に関わった意見を皆さんからいただいた上で、それぞれの柱の部分について、具体的な御意見をさらにいただくということで進めたいと思います。こういったところをもう少し強調したほうがいいのではないかというところも併せて、忌憚のない御意見をいただけるといいかと思います。

〇森田委員

これを見てすごく感動しました。この前の会議の話がこうやってまとまってきたことに、すごくびっくりしてうれしく思いました。もちろん、個々の立場での意見などもあるとは思うのですが、ゆめサポママというママの団体の取組から考えると、この骨子案は私たちがやっていっていることとすごく近いものがあり、私自身はこの理念や三つの観点に絞っているところなどは、これからの長野がワクワクできるのではないかと思いました。

そして、この「シン・生涯学習社会へ」というタイトルが、来年どうなるか分からないですが、今『シン・ウルトラマン』や「シン・何とか」というのがめちゃめちゃはやっている今にぴったりだということと、信州の「シン」であるというところで、もうマーケティング的にも非常にすばらしいなと感動しながら話を聞いていました。

〇関委員

今の西会長のお話ですが、大変興味深いということもありますし、よく分かりました。これから目指すべき生涯学習社会の方向性がよくまとめられていると思います。

その上で１点、私なりの考え方を申し上げたいと思うのですが、まず基本理念の部分になります。「すべての人が学び合い、共に変わり続ける“シン・生涯学習社会へ”」とありますが、これは大変すばらしい文だと思います。

先ほど、会長がお話しになったとおり、学びというのは本来個別的なもので、それぞれの興味関心に従って、それぞれの思いを広げ、その人自身のいろいろな知識なりを更新しながら学びの世界を広げていくというものですので、その点では、全ての人が学び合うと

いうことでいいと思います。
　さらに、社会という視点で考えていきますと、そういう個人的なレベルの知が、他者の知識なり、技術なり、考え方なりに結びつくことによって、公共的な知に広がっていくことが必要なのではないかと思います。その先にやはり地域づくりや、そこにいる人々の生活の質の向上など、そういったものが目指されるのではないかと思っています。
　そういった観点でこの基本理念を見ますと、「すべての人が学び合い、共に変わり続ける」は確かにそうですが、どこかに「つながる」とか、「広がる」など、何か社会に個人の学びが展開してつながっていくというような言葉が入ってくると、その下の三つがより結びつきとして表れてくるのではないかと私は思っているのですが、皆さんのお考えをお聞きできればと思います。

○西会長
　ありがとうございます。つながり、広がり。先ほどの信頼関係みたいなことを考えると、本当は、キーワードとしては「つながる」という言葉があるといいのかなと思いました。
　ほかの委員の方はいかがでしょうか。

○松田委員
　私たちが言っていたことが全部入っている気がします。すばらしいと思います。
　私は一番高齢者ではないかなと思うのですが、今まで若者たちといろいろお話をしていく機会がある中で、若者たちとのコミュニケーションの取り方が難しいと思いました。今後はコミュニケーションの場づくりをやって、高齢者と若者、若者と子供たち、こういう人たちとのつながりを広げていけば、今言われた「つながる」「広がる」に展開していくことになると思います。
　特に、大学生の方たちとお話をしている中で、自信がないのか、若い方たちはどうしても一歩下がってしまうことがあります。県立大学や信州大学の学生さんは少し違うかも分かりませんが、会う人たちは、そういう一歩下がったところがあります。中学生の方もいろいろ私たちのボランティア活動などに参加してもらって、すごく意欲的に活動されますが、それが高校に入るとなかなかボランティア活動に参加されません。そのような小学生、中学生、高校生、大学生というつながりをもう少し詰めていけば、なかなか面白いことになっていくのではないかと私は思います。

○西会長
　ありがとうございます。今、世代をつなぐという言葉が出てきたりしておりますけれども、秋葉委員いかがでしょうか。今、大学生という話が出たりしていますが。

○秋葉委員
　まさに多世代というか、多世代という言葉よりもっとシームレスな世代のつながりというのは、もう御指摘のとおりだと思います。
　先日も、大人と大学生のそういうセッションに事務局の方と本学学生たちが参加しました。ああいう場で若い人の意見を引き出そうとするときに、やはり彼らからすると、大人

を忖度してしまうところがすごくあります。そういう意味では、大人は１歩では足りないので２歩ぐらい引いて、もうごちゃごちゃ言わないから好きにさせる。

例えば、以前も御提案申し上げたのですが、この日は若者たちが一日公民館を仕切る日。もう大人やシニアはごちゃごちゃ言わないから、とにかく好きにしてもらう。それで、大学生が先輩で小学生を教えるでもいいし、小学生が学校でプログラミングを習っていたら、小学生を先生にして高校生が学ぶでもいいし、大人が学ぶでもいいし、本当に大人側がより意識して後ろに引くことをしないと、どうしても若い世代であるほど上を見てしまうことを非常に感じます。

ですから、これを広めていくに当たっては、本当にボリュームゾーンとしてもシニアが多いので、そこを意識することはすごく大事かなと思います。

先日、他県に行ったときに、公民館のありようが気になったのでのぞいてみたのですが、長野県で言うところの公民館的な位置づけの、それは市のレベルなのですが、もう運用は本当に若い方がやっていらっしゃるんですね。高校生のたまり場といいますか、高校生たちが集まって、時には小学生も来るというような、非常に若い人でにぎわっているようなスペースに、たまたまですが出くわすことがありました。何かそういうところにもヒントがあるのかなと感じながら聞いておりました。

ですので、先ほどの「つながる」ということの関委員からの御提案もそうですし、世代を超えたつなぎというニュアンスがどこかに明確に入れていけれたらと思いました。

〇柳澤委員

これを拝見して、言葉遣いも颯爽としていて、この三つの「シン」がキャッチフレーズのように浸透すれば、方向性を示すいい言葉になると思いました。

公民館で日頃、地域コミュニティの様子を見ていると、コロナによって動けていない現状があり、それによって地域文化が衰退し始めているということを感じています。具体的には、自治公民館である地域公民館がもう活動を２年以上停止してしまっているとか、それから公民館の学習グループも、今年度は大分、数も人数も減ってしまっています。

コロナだけが原因ではないとは思うのですが、そういった衰退していく文化もつなげていかなくてはいけないものがあると思います。颯爽とした新しいものを強調している印象ですが、そういった古い文化や、先ほどから出ている人とのつながりとか、そういう泥臭い観点も入れていく必要があると思います。

それが「信」の部分の「地域を学び」という部分や「地域づくり」というところが該当しますので、現状としてはこういうところが本当に大変な状況なので、こういった泥臭いところは大事にしていかなくてはいけない部分だと感じました。

〇堀内委員

三つの「シン」は本当に、キャッチフレーズとしてとても分かりやすくてよかったです。というのも、小学校は、どの学校でもグランドデザインというその学校の学校経営方針、運営方針があります。本校で言うと、まさにこの三つ、いつでも、どこでも、誰とでも学べるという学ぶ力と、他者と関わる力、それを受けて自分づくりとしました。今日で言うと、人生づくりでしょうか。それとぴったり合っていることに本当に驚きました。やはり

小さいときから、生涯に向けてこういう意識でつないでいくことがとても大事になってくると、西会長にお示しいただいたこの表を見て本当に感じました。

一つ、先ほど技術的リソースと人的リソースの矢印が合っていればいいというお話があったと思うのですが、本当にそう思います。まさに別々のものではなく、矢印でもいいですし、例えば、この三つの「シン」が一つの色の中に全部交わるような形にすると、より分かりやすいと感じました。

〇毛受委員

本当にすごく格調高くというとあれですが、このまとめ方がすごくきれいだなと思いました。非常に我々が言いたいことの本質をきちんと理解して書いていただいていると感じて、私も「おお」という印象を持っています。

ですので、私たちのまとめとするものはこういった形でいいと思いますし、国が出してきた最近の新しい資本主義の話の中にも、やはり学び直しや様々な階層でスキルアップみたいなことが入っています。そういった生きていくための学びという視点を絶えず意識して、若者たち、特に厳しい状況に置かれている子たちは、生涯学習から簡単に排除されていくので、この辺りのコンセプトはすごくよくなってきたので、今後はこのコンセプトに基づいて、どのような具体的な取組にしていくかを考えていく必要があると思いました。

〇深野委員

私もほかの皆さんと同じように、とても分かりやすくおまとめいただいていて、本当にありがたいと思いました。

気になっていたところは、柳澤委員がおっしゃったように、長野県はすばらしい地域や文化がありますので、やはり現実をきちんと改めて正しく学ぶということが、とても必要だと思っておりましたが、それは先にご発言があったとおりです。

そして、全体を見たときに、先ほどキーワードで「つながる」というお話があったのですが、長野県だけではなく視野を広げて考えてみては如何でしょうか。災害にしても、あるいは国籍、例えば昨今のウクライナ情勢から避難民を受け入れている地域が長野県の中にもあります。また、長野県はものづくりの企業も大変多く、お客様と全世界でつながっていて、その中で営みをしている企業も多いと思います。その手段が、ITだったり、語学だったり、それは英語に限らずですが、そうしたつながるということを、このエリアだけではなく、世界という視点も入れておいたほうが、さらに分かりやすくなるのかなと拝見しておりました。

〇西会長

ありがとうございます。少しグローバルな視点をという御発言かと思います。

そういう意味では、長野県は観光立県であり、また、様々な形で今お話があったように、長野県の産業はものづくりで非常に高い評価を受けているということもうまく生かせると、つながりというところとも関わるのかなと思います。

あとはいかがでしょうか。もし、全体に対してのコメントがなければ、少し具体的にそれぞれの柱の中身について御意見を深められるようにしたいと思います。

今、幾つか出てきたように、世代をつなぐとか個別の学びを公共的な価値へ広げられるものというのは、どう散りばめられるのか。実現可能性として具体的に議論できるのか。さらには、グローバル、地域文化の消滅をどう現実の問題として、地域というものを見るときに、どういった視点をどこの部分に設けていくことがいいのかというところを、この後は少し具体的に踏み込んで御意見をいただけるような時間にしてまいりたいと思っております。

では、最初に順番で行くと「新」、新しい。先ほどの資料３－３の説明で言うと、左下になるところです。技術的リソースというような新しい学び、テクノロジーを活用した新しい学びの推進、「学びの基盤整備」や「リテラシーの向上」ということについて、少し具体的な御意見をいただけるとありがたいと思います。

ちょうど２日ほど前でしょうか、県の教育委員会と県立図書館が８月から電子図書館を開館するということもありますので、そういったことも少し念頭に置いて御意見をいただけるといいと思っております。その辺りについてもぜひ、様々な御意見をいただきたいと思います。

〇松田委員

私はパソコンやスマートフォンが触れなかったり、操作できなかったのですが、私が知り合った若者がコンピューターの設計などをやっていたので、操作方法等を聞くと、いろいろなことを教えてもらえるなど、すばらしい反応が返ってきました。そういう若者たちには、私に教える能力も技術もあるのですが、こちらから言わないとなかなか反応が返ってきません。若者たちと上手くコミュニケーションをとれれば、凄い能力を引きだすことが出来ます。今の技術的リソースの中の、まさにそういうところですが、それは私ら高齢者もそうです。ZOOMやスマートフォンを使いこなせない。そういうときに若者の助けがあればすごく助かる面があります。これはすばらしいことだと思います。

こういうことが広がっていけばいいと思います。公民館やいろいろな施設の地域の人材が不足しているように感じます。そのような中で、前に樋口委員の小滝地区のほうに伺ったのですが、そこの公民館主事や、中条の方は、すごくやる気があり活発に活動されています。

でも、違う地区に行くと、二、三年で公民館等の方が異動で代わってしまいます。ということは、次の方は知識も経験もなく、前任者からの充分な引継ぎもない状況では、なかなか新しい催しが企画、実行されにくいと思います。何かそういう指導者や若者の使い方、使い方と言うとおかしいですが、若者を引っ張り出すような何か工夫があればいいのかなと思います。

前に信州大学の農学部の学生さんとも知り合ったのですが、その方は伊那のほうでいろいろな活動をされて、田舎に帰るとおっしゃっていたのですが、大学院に戻ってこられて、また地域で活動されています。そういう一旦出られた方が、帰ってこない場合が多いです。そういう人たちに戻ってきてもらうような魅力的な県になっていったら、皆さんもＵターンやＩターンをしてくれて、そこでいろいろなことが発展していくのではないかと思います。

○西会長
　まさに今、どうつなげるか、つながるかということかと伺っておりました。幾ら技術的にどんどんいいものができても、我々が使いこなせなければ結局意味がなくて、それをうまく使いこなすためにどう人間を活用するかというところで、資料３－３でそこが切れているというのは、実は非常に大きな欠落だったので、そこがお互いに行き来できる形で有効に活用しながら、地域の活性化、人間関係づくりというものが実現していくのかと今、伺っていました。
　私も大学生を相手にしていますけれども、恐らく若者は結構知っているのですが、教え下手というか、結局世代の違う人に話をするときに、普段同世代で話していると通じることが通じない。ということは、やはり言葉を変えて説明していかなければいけないというのは、ある意味で言うと、実は彼らにとっての学びでもあって、本当に世代が同じ同士だと、いつまでたっても同じ語彙や言語の中でしか生活していないのが、世代を超えたところとの関係が出てくると、語る言葉を変えていくという、そういったいい意味での彼らの学びにもなってくる部分もあると思うので、新しいリソースができてきたときに、それをどう人間関係をつなぐ手段や場にするかということも、今の松田委員のお話を聞いていて、一つポイントだと思った次第であります。

○柳澤委員
　佐久市の公民館もやろうとしているのですが、ここにあるデジタル・ディバイドの解消ということで、高齢の方でスマホなどが使えない方の講座を多くしているのですが、そこに今、関係を少しずつつくっている佐久大学の学生に入ってもらって、大学生は機種が違っていても、感覚的にパッとやるじゃないですか。ですので、スマホの会社の方が講師で来ていても、そこに何人か学生が入って具体的に横で教えてもらうと本当にありがたいと思って、そういう関係をつくろうと今少しずつやっています。

○西会長
　やはり高齢者の方は、自分たちで使えるようになりたいという必要感は結構持っているということですか。

○柳澤委員
　そうですね。スマホやパソコンなどがとても人気です。そして、大学生にも聞くと、自分たちにはできそうだというところまで行っているので、少しずつ近寄せているところです。
　でも、あまりこの部分をこうやってというのではなく、先ほど委員さんがおっしゃったように、最初はお手伝いかもしれないけれども、その講座自体を企画してもらう。その次には、学生自身が企画して、イベントをして、公民館というのはこんなにいい所ということで若者に集まってもらう。そういうことも学生が言ったり書いたりしているので、それを実現化していきたいと思っています。

○森田委員

今日はチラシを１枚しか持ってきていないのですが、前の会議でもお話をした「ままのてつなご」というお母さん向けの子育てサロンを始めて、もう半年ぐらいたちました。毎週３回開催していますが、参加は無料でオンラインなので、本当にたくさんの方に参加していただいています。

これが本当にすごく大事だなと思うのが、助産師さんとの相談会などもありますし、体を動かすものもあるし、手遊びなどという意味で、いろいろな学びの場をつくっています。これが本当に息抜きや気晴らしになったりということなので、もっとたくさんの人に知ってもらえたらと思うのですが、前回と同様に、やはり幾ら場をつくっても、知ってもらう活動が難しいところだと思います。ここを地域の公民館や行政などと一緒に知ってもらう活動をすることによって、たくさんの人に使ってもらえるのではないかと思います。

とはいえ、御年配の方だけではなく、お母さんたちもZOOMにすごく抵抗があります。ある地域の子育て支援課の方には、少しこちらへ来て説明会をしてもらえるかと言われたので、今後やはりもっと地域に行って、「ZOOMの使い方講座」みたいなことをたくさんやっていこうと。そのときに、これがあるよという次の目的をお見せすることによって、何のためにZOOMを使えるようになったら自分の生活が幸せになれるかを見せることがすごく大事だと思っています。

もし、スマホやパソコンの使い方なら、その先に、自分にとって幸せをつくっておかないと、多分それを学んだからといって使えないと思うので、より幸せに、充実した生活になるためのオンライン講座のようなものを充実させたり、浸透させたり、知ってもらう活動がすごくよいと思います。それがあるから、少しみんなでスマホやZOOMを使えるようになろうという手段を身につけていくというリテラシーを高めるため、何のためにそれをするのかという見せ方がすごく大事だと思います。

取りあえずこれから先、どんどんPRができるようになったら、いろいろなところで、これに参加できるからみんなでスマホやZOOMの使い方をやろうよということをやっていきたいと思っています。

○西会長

恐らく今のことは、使えることがゴールではなく、使えて次に何ができるか、そこをゴールにしてもらわないといけない。その意味でもリテラシーの向上というのが、何をするためにそこにアクセスしていくのか、アクセスの手段を私たちは知っていけばいいということだと思います。

何かここにアクセスすればこういう情報が得られるということが分散していて、なかなか一元化していません。生涯学習という今、我々の議論の場にあるものは非常に幅広い領域があって、例えば、何か生涯学習について情報を得たいと思っても、なかなか一元化されていません。

幼い子供、学校、学齢の子供たち、あるいはお母さん世代とかシルバー世代、超シルバー世代という分け方がいいかどうかは別にしても、非常に幅広い領域の中で、情報が外にみんな分散していて、どこに行けば今の自分の困り事を知れるのかというところも、やはり今度は非常にテクノロジーを使えば使うほど、そこをどうアクセスしやすくしてあげる

かが多分大切になってきます。使えても、迷子になってしまったら致し方ないような気がします。

それは、大学などでもホームページをつくるときに、いろいろ情報は全部あるけれども、三つ、四つ下まで行かないと出てこないなど、本当にそういうことがあります。県のホームページも、どこへ行ったらどの情報が得られるのか、検索しても出てこないこともあるので、それを今度は発信する側がどうやって統合していくかが必要になります。それがやはり人的な持っているものから技術的なものに意見していくということにも多分なってくると思います。

○秋葉委員

西会長がおっしゃってくださったことと、その前の森田委員の話から引き継いでですが、西会長と同じで、私も学生たちと接して、世代区分的な言い方をするといわゆるＺ世代を見ていると、彼らは、Wi-Fiは水道で、スマホは電子レンジ以下です。

ちなみに、公民館には、この提言を受けて、Wi-Fiは必ず入れていただきたいと思います。しかも、ナローではなくてきちんとつながるWi-Fiを入れていただきたいと思います。

実は、そのＺ世代の下に、さらにデジタルネイティブのα世代という、まさに小学校で今プログラミングをやっているその世代に落ちてくると、もう通信環境があって当たり前で、本当に時々私も、デジタル・ディバイドされているのは、実はこちら側なのではないかと感じています。

我々は今ここで議論をしていて、おじいさんおばあさんをイメージして、そういう方々がディバイドされないようにケアしようと思ってイメージしている方が多いと思うのですが、実は、ディバイドされているのはこちら側で、もう若いネイティブな彼らにしてみたら、何でこれが分からないのかがよく分からないという状況に、もう既に陥っていると現場で感じることが非常に多いです。

まさにおっしゃられたように、これを使って何をするのかというところがすごく大事で、そのために資料一番上のこの変わり続ける、学び続ける生涯学習社会へというところを俯瞰しようとしているわけですけれども、そこへ向けてのテクノロジーは手段ですので、この世界をやはり見えるようにしていく。それで、その切り口はいろいろな切り口があって、恐らく今回つくろうとしているものが終わる頃には、メタバースは普通になっているのではと思います。

先ほどもうまく言えなかったのですが、人が自分の心構え、学ぶスタイルも含めて変わっていかないといけないところと、社会の変化、特にテクノロジーの変化というものを、どううまく合わせていくのか、それを多世代にわたってというところを、ぜひ、生涯学習の範囲を超えてしまうのかもしれないですけれども、結局それが地域づくりにつながっていくので、そういう感覚は持ち続けていたいと思います。

すみません、具体的に何をどこをどう変えるという意見がないのですが、とりわけテクノロジーやネットワークのことに関して、最近特に強く感じています。ディバイドされているのはこちら側ではないかという感覚です。

○毛受委員

改めて資料を拝見しながら、非常にいい方向性なので、さらにどういうポイントが必要かという視点で考えていくと、今皆さんがおっしゃっているように、非常にディバイドとか、なかなかそういう学びにアクセスしづらい、例えば、ZOOMのことにしても、もう無理と思っています。かなり奥に沈んでしまっている状態にいるので、触発する人、大丈夫だよ、いけますよという、この新しいコンセプトにつなぐための人が必要だということは、もう少し書いてもいいと思います。少し奥底にいる、ディバイドの先にいる人たちを誘うとか、つなぐような人たちの育成というか、生涯学習社会に誘って仲間づくりをおこなうなど、そういう視点があってもいいと思いました。

非常にいいものですので、その世界との格差というか隔たりを埋めるという視点がもう少し欲しいと思いました。そこを埋めるのは、本人たちの自助努力だけではなくて、誰かいろいろな人たちが誘う。あなたはできるよ、やってみようという、そういう誘い方です。

私たちの役割として、コーディネーターが若者たちをそういう世界にまず１回触れさせる。これをすると、面白い、やっていけるんだとなるのですが、１個目の触れさせる瞬間は、やはり少しコーディネートが要ります。奥底にいる人たちを１回つなぐおせっかいが要るので、そのおせっかい的なコーディネーター、つないでいく層ですね。それを生涯学習への理想像の中に入れるといいと感じました。

○西会長

やはりどうやって取り込むか、人材を取り込んでつなげるかというところだと思います。

特に思うのは、今、公民館はどれくらいWi-Fi環境が整っているのか。新しいところは結構いいと思うのですが、やはりこういったハード面というのは、大体５年周期でどんどん変わっていったときに、更新できるだけの財力・財源がまずあるかというところです。１回つくったら、そこでオーケーと思っている方が結構多いと思うのですが、パソコンやスマホなども結局、何年かごとに買い替えるということは、つなぐためのそういった設備も基本設備として５年なりでどんどん入れ替えていかないと、パソコンやスマホの機能がよくなれば通信容量が上がるわけで、回線がどんどん狭くなります。

そうしたときに、更新していかれるものをちゃんと意識しておける。１回つければオーケーという発想から、当然のことですけれども、やはり更新が必要だと。その時間も短くなっています。新しいインターネット機器を使おうとすればするほど、更新周期が短くなるので、そういったところの財源をどうやって確保できるのかということだと思います。

そういうところは、実はある一定年齢以上よりは若い人たちが関わって、「これでは使えません」と言うことが、多分一番行政に響くのではないかと思います。今、声を上げないのでそのままだし、必要感もない。でも、必要感が出てきたときに誰が一番動かせるのは、多分若者です。若者が言うと響くと思います。

○森田委員

ここは新しいWi-Fiが入ったのだと思います。下に「新しいものが入りました」と書いてありました。多分、前のものが古くて２本つくったのかなと先ほど見てきたのですが、やはりWi-Fiがありますといったら、私も今Wi-Fiをつなげました。

先ほど秋葉委員が言われましたけれども、本当にWi-Fiがあるところに人が集まるみたいな感覚があるので、うちは飲食店もやっていますけれども、やはりフリーWi-Fiにしていることによって選ばれるお店になるという、一つのツールにもなっているので、公民館にWi-Fiがあることによって、子供たちがもしかしたら集まってくるかもしれません。ゲーム機なども、今、Wi-Fiがあることでできることが増えるので、公民館のWi-Fi全設置は、面白いなというか、人を集める一つのツールにもなると感じました。

○毛受委員
まさにWi-Fiのアクセスポイントは井戸端会議のような感じです。Wi-Fi端会議です。

○西会長
いかがでしょうか。特に御意見がなければ二つ目の話へ行きたいと思います。また後から全体をまとめてお伺いする時間を取りたいと思うのですが、次に信州の「信」です。資料３－３では人的リソースと書いているところですが、「社会的包摂の推進」「多様性を活かした地域コミュニティづくり」と、「信頼」というキーワードで今、取りまとめているところですが、ここについて御意見をいただければと思います。人的なつながりです。
あとは、多様性ですね。先ほどウクライナ難民の方を長野県でも受け入れているというお話も出てきていると思うのですが、そういった人のつながりをどうつくるかというところ、そういう場をつくれていくかにも関わると思いますが、いかがでしょうか。

○松田委員
私は、長寿社会開発センターというシニア大学などをやっているところに出たのですが、賛助会といってシニアの集まりがあります。そこで、白馬のほうで昔のレコードを聞こうということで、プレーヤーを持っていって、第１回目は終わって、次に２回目が今月にあるのですが、そういうところに地域の高齢者の方が来て、昔の自分のレコードを持ってきてこの曲をかけてほしいと。というのは、もうプレーヤーを持っていません。レコードは捨てるに忍びないということで、そういう催しを白馬の包括の方と一緒に今やっています。
やはり、そこに来られたお年寄りの方は、回想法にもなるし、私たちの地域で今度やるから、来てもらえないかとおっしゃって、そういうことで広がりができていっています。そこで地域と結んで、私は松川のほうなので、白馬とはあまり関係ないのですが、そういうことでつながっていって、今度はまた違う池田などいろいろなところへそれを持っていきたいと思っています。そういうことで地域とつながっていければいいと思います。
前に樋口さんの小滝のほうへ行かせてもらったのですが、すごく地域の結びつきが強いです。私らの村や市では、多分あそこまでのつながりの強さは持てないですけれども、それがすごく参考になるのではないかと、私はあのとき感じました。

○樋口委員
今、まだ１か月にもならないのですが、栄村の公民館長をお前やってくれないかと言われて、「はい」ということで受けることになりました。自分のやりたいことは、まさに今ここの「信」のところの上段にある「『答えのない問い』に対して、地域の特性に応じた

『自分たちの答え』を見つける」ということです。いろいろな人がそこに暮らしていながら、いろいろな充実した人生を過ごしていくために、その都度の課題があると思います。

けれども、誰も何も課題や問題を自分からアピールしたり出したりしてこない。そうすると、もっと自分のいいところをどうやってつくっていこうかというところが今はないんじゃないかと思って、まさにこの「答えのない問い」を呼びかけ続けて、自分は歩き回りたいと思っています。そして、何か感じてもらって、自分たちの答えを見つけていってと、ここに書かれてあるとおりのことをやっていきたいと思っています。

それには、対話を繰り返し投げかけていって、地域の人たちの思いを吐き出してもらうというか、吸い上げていくことが、「新」に当たると思います。それらをみんなで考えて何か夢を語ることができたら、「信」にある持続可能な地域をつくっていくという、まさに自分がこれから栄村中を歩き回りながらいろいろな人と会って、そういうムードをつくっていきたいということです。ここに書かれてあるとおりのことをやりたいとずっと思って、今動き始めています。

ということで、小滝という私の集落は、非常につながりが密だというお話をいただいたのですが、自分の集落は小さいですけれども、まさにこれをやり続けてきた集落だったので、それを村全体に波及させていきたいと思っています。まさにここの「信」について、自分がはまっています。

○西会長

本当にそういう地域で関係性ができてくることが今とても大切で、どうしても人間関係を地域社会の中でどうつくるかということがすごく問題になります。

ところが、やはり古い集落やそこの在地の方であれば当然のことが、都市部だと当然ではなくなっているという中で、関係性をつくっていったり、受入れをしていく、様々な価値観の多様性を認めていける関係をどうつくっていくかということが、多分信州の「信」、信頼の「信」であると思います。

○関委員

今、白馬高校で校長をしておりますので、学校の取組の一つの例をお示しをしたいと思うのですが、本校に地域でつくっていただいている公営塾という塾があります。もちろん大学受験のためのコースもありますし、基礎学力を充実させるためのコースもあって、何人かの生徒がそこでお世話になっているのですが、今度そこに地域コースという新しいコースをつくろうということをやっています。

どういうことかと言いますと、こういう地域高校というのは、大変生徒の数もクラブの数も少ないので、学校で生徒が自分の思いがあっても、なかなか活動に具体的に取り組めないという状況があります。例えば、白馬高校は結構スキーのレベルが高くて、全国や世界のレベルで活躍する選手もいます。入ってくる生徒も、最初はスキー部に入るのですが、なかなかそういう競技レベルのスキーの練習についていかれない。自分はスキーが好きだけれども、もっと楽しんでスキーをやりたいけれども、クラブに入っていると、どうもそれだけではもうすり減らして疲れ果ててしまうという生徒がいます。そういう生徒に基礎スキーを地元の方に教えていただければ、そういうところで生徒の活動が満たされます。

あるいは、マウンテンバイクをやりたいという人もいますし、白馬は星もとてもきれいですので、天体観測をしたいという生徒もいます。また、白馬の美しい山並みを絵に描きたいけれども、なかなか絵心がないし、誰か絵を描くことを教えてくれないかとか。あるいは、この前、田植えのボランティアに行ったらなかなか面白いので、そういう農業に興味があるけれども、誰か面倒見てくれないかとか、あと伝統工芸といったものをやってみたいなど、そういう様々な生徒の個々の興味関心を地元の方に受け止めていただけるとありがたい。その地域の方が、自分の畑で一緒に何かつくってみるかとか、スキー場へ連れて行ってスキーの指導をしてくださるとか、そういうことで生徒の意欲も増しますし、ある意味、そうやって生徒に教えてくださることで、教える大人の側のスキルもより磨かれていくというか、数年やっていなかったけれども、子供に教えるから自分ももう一遍ブラッシュアップして、一緒にやろうみたいな、そういう関係性ができてきます。

そうなってくると、やはり地域の中で人材がまた新たに生まれてくる。生まれてくるという言い方は変ですが、スキルアップした大人がどんどん増えていって、それをお互い同士で共有できるような環境が生まれてくると、学校を起点にして、地域全体にいろいろな活動をする場が広がっていって、みんなで学ぶ社会ができるということで、地域コースというものを一つつくろうということを今年から始めているところですが、そんな形が一つ考えられるのかなと思っています。

あと、本校は外部講師のチーム・ティーチングというのを多く取り入れていまして、地域の外国人の方もいらっしゃるので、生の英語を教室に持ち込んでコミュニケーションをするということもありますし、自然環境について詳しい知見をお持ちの方をお呼びして、実際に現地に行くこともありますし、教室でお話を伺うこともあります。そうやって地域の皆さんに学校に入っていただいて、お互いに知を共有し合うような取組をしているところですので、こうやって学校と地域が互いに成長するというのは、本当に大事なことだと感じているところです。

○深野委員

今、皆さんがそれぞれのお立場で活発に、あるいは実験的に一歩踏み出されているという活動を伺って、すばらしいと思いながら聞かせていただきました。

地域と学校、あるいはスクール・コミュニティの形成というところが書かれているのですが、以前にも少し発言させていただいたのですが、上伊那地域でそういった実験的な取組が盛んに行われているものですから、そうした取組を知っていただき、ご興味のある方に見ていただくということは、とても重要だと思っております。

そういった活動のスタート当初は、積極的に関わらせていただきましたが、現在の状況を明確に皆様にご説明することはできません。その中心になっている方をご紹介いたしますので、実践されていることを知っていただくのも、さらなる具体的なご提案につながると考えております。

○伊藤委員

「学校と地域が互いに」というところですが、それは子供たちがあってのことですけれども、そこに家族というか、家庭もあってのことだと思うので、もし可能であれば、この

中に「家庭」も入れていただきたいと思います。親からすると、学校と地域で、私たち親は？と、それはないとは思うのですが、逆にそうではなくて、家庭・家族も皆さんで一緒に地域、子供たちをというスキルといいますか、要望を文字に入れたらどうかと思います。

親は忙しいからいいのねではなくて、いや、そうじゃないよ、当然家庭があって、家庭、家族、皆さんでということで、少し入れていただければなと思います。

あとは、皆様方のお話も聞いていて、実際に私の場合ですが、これで義務教育を卒業してしまったので、子供の関わりとして、学校と関わることが正直なくて、地域と関わることも、もうほとんどありません。皆さんの話を聞きながら、では自分たちの子供や若い子たちを地域や公民館と関わらせたり、興味を持たせたりするためには、それこそ私たち親や家庭がどう仕掛けなければいけないのかを考えさせられるというか、やはりスイッチを押してあげないといけないのかなと感じました。

機会があったり、情報があれば、私たちもどんどん参加したいし、お手伝いもしたいし、当然、子供たちにも関わらせてあげたい。話にもあったように、子供たちは本当にSNSばかりで、ばかりという言い方はあれですが、勉強もしていますが、コミュニケーションのスキルもすごくだんだん落ちてきているというか、どう話していいか分かっていません。

実際もう皆さんも御存じだと思いますが、携帯ばかりやっているので、電話のかけ方を知りません。目上の人の電話のかけ方を知らなかったり、何と挨拶していいのか分からない、もう本当にそういうところがありますので、こういった機会を通じて、まずはそういう社会スキルというところも含めて、一人一人が地域社会で生きていくために重要なことだと感じました。

〇西会長

恐らく今、伊藤委員がおっしゃっていた、義務教育段階のお子さんがいなくなったということは、地域というのは、恐らく幾つかの層に分かれていて、義務教育、小学校中学校のお子さんがいる家庭は、結構本当にコミュニティが小さなものの中で、学校がベースになって動ける。ところが、高等学校になると、学区が広くなるので、広いコミュニティといっても、なかなかそれがつくりにくくなります。

例えば、本当に地域の中核校のような学校だと、ある程度は回るでしょうけれども、子供たち生徒は、広域で通学したりということで、学校をベースにしても、やはり取り組み方の色が全く違ってくる形になるだろうと。大学生であれば、本当に県外の学生たちとかということになって、地域とどう関わっていくかは大きな一つの課題ですが、うまくはまると定着するという、実は大学生だとやはりそういった部分があったりもするので、恐らく御家庭のお子さんの学齢の中でも、フェーズが変わってくるようなところだと思います。

〇毛受委員

やはり家庭の役割はものすごく大きいのですが、家庭をことさら強調すると、結構家庭がうまくいっていないところについて、これがすごく難しいです。書かないとその人たちにメッセージが届かないし、書くと書き方をよく考えなければいけない。その辺りを配慮しながら、確かにそういう視点を入れられるといいと思います。

また、中等教育、いわゆる中学高校の段階で、いい探究学習をしっかりやると、本当に

生涯学習に目覚めていくので、結構継続して生涯学習者になります。そのために、やはり具体的な手段として、我々はインターンなどを提供していくのですが、これを学校、地域、家庭が連携をして、これは全部連携しないとできませんので、地域のどんどん寂れていく現状に、インターンをきっかけに気づくとか、そうすると、それを学校に持ち帰ってきて、学校でどうしたらいいのかの探究が始まって、それをやっていくとものすごく面白くて、そのままその課題を持って大学へ行くみたいな、そういうサイクルは、やはりどこそこにもかなり起こってきています。

こういうところをうまく取り入れ、学校の中でやはり生涯学習者を育てておかないと、後でやろうとすると結構大変です。ですので、中学高校の辺りで徹底して生涯学習者を育てるための仕掛けをつくることを書き込んでもいいぐらいだと私は思っています。そうすると、大学のところも非常に楽になっていきます。生涯学習者に育っていないから、大学でも結構大変になるのです。

私は、とにかく中学高校のところで徹底した探究学習と地域との出会い、触発をどうつくっていくかが鍵だと申し上げています。

〇西会長

多分、今の生徒たち、子供たちのことを考えると、今の白馬さんの先ほどの事例は、生徒たちの思いをかなえる、これだけあるからこの中から選べではないんですね。こういうことをやりたいけれども、誰か人材がいませんかと地域に出していく。

一方で、先ほどの佐久の公民館だと、こういうことが地域で困っていると。そういうことに、若い人に関わってもらえるように、お互いに持っているスキルを活用できる。地域の方が持っているスキルを子供たちの教育に活用できるという、何か若い人から年齢の上の方だけではなくて、上の方から今度、若い人たちが新たなものを勝ち取っていくというか、学んでいくという、それぞれの矢印をうまく活用できる素材はどこにあるのかというのが、多分それぞれの地域や施設といったところで検討をしていく。あるいは、本当に学校の中でどんなことができるのかとか、地域社会が何を取り組めばいいのかというところが少し見えてくると、いいのでしょうか。

何か個別最適化ということも先ほど書いたのですが、個に応じながら、個を育成することが、やはり地域の支えになってくる。それがまさにここで骨子の案としてつくっている持続可能な地域社会ということで、先ほどの栄村の事例も多分そうだと思います。持っている個々のものを包括的に捉えながら、課題を明らかにしていく。そして、それを解決するために何が必要なのかということを住民で熟議するという形になります。

〇森田委員

関委員に質問してもいいですか。公営塾しろうま學舎さんは、白馬村と小谷村が協力して、白馬高校内で学習塾を運営していますと書いてあるのですが、これは村がお金を出してくださっているということでしょうか。

〇関委員

そうです。

○森田委員
　なるほど。これを学校内の敷地でというのはすごくないですか。
　白馬高校以外の生徒さんも来たりすることはあるんですか。

○関委員
　現状はないです。でも、そういった方も一緒に学べる場ができるといいですよねということで今考えているところです。

○森田委員
　そうですよ、「生徒一人ひとりが『なりたい自分』を見つけ、その進路が実現できるよう、地域をあげて支援します」と書いてあって、まさに毛受委員が先ほど言われていたのが、ここで今やられているんだなと。
　地域で支えてもらったら、やはりその地域に愛着が湧くのではないかと、このホームページを見る限りですが、それはすごく感じました。これがいろいろなところに広がったらすてきだなと感じました。

○西会長
　県の施設に地方の行政が複数そういう形で入っていくというのは、すごく珍しいのではないかと思います。

○関委員
　特殊な事例だと思います。

○西会長
　ええ、特殊な事例だと思います。県の施設の中に、地方の行政が複数タッグを組んで入っていって、そこをフィールドにするというのは。でも、本当はもう少しそこがうまく融通が利くと、いろいろな形でやりやすくなるという気がしました。

○秋葉委員
　話を聞いて、まさに「探究」という言葉をぜひこの中に入れておきたいと思います。多分皆さんも今そう思いながら聞かれていたと思います。「信」のところです。
　少し具体的に白馬高校の例も御披露いただいたのですが、地域に飛び出して、地域に課題があるので、地域で学んでいくというスタイル、そういうふうに学ぶのは学校の学舎の中ではなくて、地域に学びのネタがあり、地域に先生がいて、地域に仲間がいるという感覚を、なるべく早くみんなで持てるように仕掛けていくと、この「信」の内容がすごく加速していくと思います。
　先ほど、公民館というところで、割に施設依存のような話をしていたのですが、とりわけ「信」の切り口で見たときというのは、私は完全に面的だと思います。そこにいろいろな方々がいて、いろいろな方々がいるから、信頼につながっていくということだと非常に思います。

それで、今日は会場におられる方に資料をお配りしました。オンラインの皆様はオンラインのURLをまた御案内いたしますが、このお配りした「CSI JOURNAL」は、私がセンター長をしている本学のソーシャル・イノベーション創出センターの年間レポートです。これのちょうど真ん中のページを開いていただきますと、学生の活躍ということで広げてお見せすると、こういうページで、本当に一部の学生しか載せられていないのですが、地域に飛び出していった学生が、地域の中でものすごく学ぶんです。白馬でやっていただいていることの大学生版みたいな感じで御理解いただいたらいいのかなと思います。

そうすると、大人もうれしいですし、大人も先生になるし、学生たちに教えてもらうということが、加速度的にぐるぐる回っていきます。この仕掛けを全県で展開できると、別にうちの大学が中心になる必要は全然なくて、いろいろな人たちがおられますし、そういうことができると非常にいいのかなと思いました。

今の文脈で御参考になりそうかと思ったので、御紹介させていただきました。

ぜひ探究という概念を入れたいと思います。

〇西会長

「多様性を活かした地域コミュニティづくり」のところの二つ目に、「地域を学び」と始まっているところは、「探究的に人や地域を学び」ぐらいで、三つ目のところに、「家庭」を何とか入れる。何となくそうすると、今のお話の中で、持続可能な地域づくりということに人材育成も含めて、そういう探究的な学びが必要だということはメッセージとして伝わってくると思います。そこに、いろいろな年齢層の人や、人間と関わることでコミュニティー、あるいはコミュニケーションということについても学ぶ機会になる。そんなイメージかなと思います。

探究はやはり「究める」ではなくて「求める」でしょうか。迷いながらでもいいので。

あまり時間もなくなってきたので、また最後に少し全体で御意見をいただく時間をつくるということで、最後に真の「シン」でございます。「働く世代、子育て世代の多様な学びの推進」「シニア世代の多様な学びの推進」ということで、少しこの辺りで世代ということが大きなものになってきます。

そこで、人的リソースや技術的リソースをうまく使いながら、やはりその世代にかかわらず学び続けることにつなげられるようなイメージを、もう少し皆さんと御意見を交わしながらいけるといいと思いますが、いかがでしょうか。

〇森田委員

先ほどのお話の家庭というところで、お母さんが学ぶことの楽しさを知ると、それを見て子供にもという意味では、子育て世代の人たちが学ぶことのメリットはすごくあるのではないかと思います。やはり子育て世代の人たちが学ぶことがすごく大事です。

あと、私はコーチングアカデミーというコーチングのスクールをやっています。働く世代の方が来てくださっているのですが、うん十万します。ですので、ある若い20代の男性の方が学びに来たときに、専門学校でもなく、大人になって何十万も払ってくるのはすごいことなので、その彼に聞いたら、上司、要は先輩に、社会人になったら、給料の10%は毎月自分に投資をしたほうがいいと言われたということを基に学びに来られたそうです。

ですので、やはり子供たちもそうですが、大人の私たち、働く世代と子育て世代が学ぶのが当たり前、そして学ぶことで幸せになれるというところを見せていくということがすごく大事だと思うので、働く世代と子育て世代が学び続けるというのはすごく大事だと思いました。

また、生涯をかけての自己変容とありますが、「自己変容」という言葉が多分一般的に受け入れづらいかなと思います。上の「共に変わり続ける」のほうがしっくりくると思います。

〇西会長

共に変わり続ける「真」の生涯学習。

〇森田委員

そのほうが何か受け入れやすいと思うと、やはり先ほどの関委員の「つながる」「広がる」について、基本理念に何かが入るといいのかなと思いました。

ちなみに、「ままのてつなご」は、地域のママを出会いのきっかけとして御活用くださいということで、講師は全員長野県のお母さんです。でも、県外の方も結構活用してくださっていて、たまたま知ってくださった方や、長野が出身で、ほかの地域に行ったお母さんもすごく使ってくれているという意味では、長野が地元でよかったと言ってくださる方もいるので、すごくいいなと思っています。

あと、やはりオンラインのメリットは、先ほどの世界中からということで、実は「ままのてつなご」に、アメリカに住んでいる日本人の方で運営に関わってくださった方がいたのですが、その方は別に長野の出身ではなく、たまたま知り合ったのですが、その方は今帰国していて、長野に観光に行きたいということで来週来られます。ですので、こういうオンラインを通じて、長野の観光でなくても興味を持ってもらったり、あるいは、ゆめサポママがあるから長野はいいな、長野に引っ越したいぐらいですと言ってくださる方がいるので、やはりこういう学びの場をつくることは、移住などにもつながるのではないかと感じています。

〇松田委員

ここに出ている「真」の中で、「サードプレイス」という言葉が出ているのですが、今、森田委員が言われたように、子育てをやっているママは、私が聞いている中ではかなり孤独な方というか、教えてもらう人があまりいない。だれかとつながっていたらいいのですが、お母さんもおばあちゃんもどこか遠く離れていると。

そういう人たちが癒される場所、サードプレイスという、私もそうですが、私も関西からこちらへ来たのはサードプレイスではないですが、そういうものを求めてこちらへ来たので、こういうのがすごくいいなと思います。こういう場所が、私たち高齢者もそうですし、ママさんもそうですが、子供たちもサードプレイス、居場所がありません。そういう居場所をつくってあげたらすごくいいと思います。

私はその中でコミュニティスクールというのが、今、長野県でどれぐらいになっているのか分からないのですが、やはり全然やっていないところもあれば、やっておられるとこ

ろもあるし、そういうものを広げていって、そこに居場所や、先ほど言われたように、義務教育が終わったお父さん、お母さんたちがコミュニティスクールに関わっていくというのが、すごく発展性があっていいと思います。

この前に講習がありました。岸さんという千葉県でコミュニティ・スクールを運営されている方なのですが、私どもはフェイスブックでお友達になって、いろいろお聞きしているのですが、すごく活躍をされています。それも全部卒業された後の方が一生懸命やっておられて、そこがまた子供の居場所になっているということです。こういうところに来れば、例えばお母さん方がほっと一息つける、そういう場もできるのではないかと思うので、そういうことを推進していければいいと思います。

ただ、それにはやはりリーダー、ああいう岸さんのようなリーダーや先生、校長先生が推進していかないと、３年ごとに替わっていったら、それはなくなっていくと思うので、そういうことを定着させるような何か、サードプレイスというものをつくる、そういうものがあればいいと思うところです。

○堀内委員

まさに学校の施設を使ってというところで、前回もお話ししたと思うのですが、本校は「お助けっ十ルーム」というものがありまして、そこに30～40人の地域の方が会員として入っていて、２時間目休みに子供たちと一緒に運動をしたり、お手玉をしたり遊ぶというのが日々続いています。そこは校外活動でお手伝いしてくださるお助けっ十の方もいたりということで、まさに学校の中にそういう施設がある学校で、とてもいいと思っています。

ただ、前回もお話ししましたが、少し高齢化が進んでいます。平成26年にできたので、既に７～８年持続しているのですが、高齢化が進んでいくということで先ほどもお話がありましたが、若いお母さんたち、例えばお子さんを卒業させたお母さんたちの居場所やコミュニティの場、またお手伝いの場としても提供できるし、逆に子供たちが今、クロームブックやタブレットを非常に盛んにおうちにも持ち帰って１人１端末でやっているので、それをそのお助けっ十ルームへ行って、おじいちゃん、おばあちゃんや地域の人に教えたり、一緒にこんなことができるんだということを、逆に子供から地域の皆さんに発信するというところで、また交流もできるし、一緒につくり上げることができます。

なぜ持続できているのかを考えたときに、無理は決してしていないということです。本当に無理はしないで、できる人ができる時に行こうということで、そのお助けっ十ルームの方は、子供たちにいろいろ教えてやろうというスタンスではないそうです。一緒に楽しもう、一緒にやろうというスタンスでやっていると盛んに言われます。おじいちゃんもおばあちゃんも、若いお母さんたちも、みんなで楽しもうという協働性というか、そういうことが楽しいのかなと、今お話をお聞きして思いました。

○柳澤委員

佐久大学と昨年からつながっていて、授業の一環として佐久市の公民館に来ているのですが、公民館でやっていることに参加者の一人として一緒に参加しています。それが大変有効だなと私も感じていますし、そこでは大学生が非常に話すというか、とてもいろいろなことを語ってくれるなということを感じています。ですので、これは本当に深めていき

たいと思っています。
　それから、公民館は全国的に「集い」「学び」「結ぶ」というキャッチコピーがあるのですが、まさにこのことを大事に、さらにもう一度考えていきたいと思います。そこで、先ほどから引っかかっているのが、少し戻って信頼の「信」のところに、「誰もがワクワクできる公民館活動の推進」とあります。もちろん理想として書かれていることなのですが、公民館は居場所としての、ただ集う場所というものでもあるので、ここのサードプレイス、何か提供をして待ち構えていようというものではなくて、ほっとする場所をつくって、そしてそこに誰でも来られる、そういう場所をつくるという考え方もすごく大事だと思いました。

○西会長
　フリースペースのようなものがあって、自由に人がおしゃべりをしたり。

○柳澤委員
　はい、それは実際にあります。実際にあるのですが、なかなか広報不足なのか、コロナもありますので通常どおりにはいかないのですが、本当にほっとする場所、先ほど松田委員から、昔のレコードを聞こうみたいな話がありましたが、何かすごい講座を用意して待ち構えているというのではなく、何かほっとするようなものを大事にしていくということも大切だと思いました。
　それから、社会教育は、公民館もそうですが、来る人に対するものになりがちです。けれども、本当の課題は来ない人のために何ができるかです。「誰一人取り残されることなく」や、「誰もが」という言葉が多用されています。そこを、言葉としては美しいけれども、ではどうやっていくか、難しい部分だと思います。
　公民館は高齢の方がすごく多いのですが、公民館に来ない方にもというのは、もちろん考えているのですが、そういったところを実際にやるのは結構深くて、今日討議している部分は表題でこの下に多分いろいろ具体的なものが付いていくと思うので、これでいいと思いますが、具体的に考えていくと、現状では頭を抱えてしまいます。

○樋口委員
　今の柳澤委員の、来る人を待っていて来ない人はどうするのかという話ですが、自分はその反対に、栄村だからできることだろうけれども、自分が外に行く。自分が来ない人のそばへ行って、いろいろな話を聞き出したり、思いを出してもらいたいということをやっていきたい。ですから、栄村だけしかできないことかもしれないですが、そういうことを自分は少しやってみようかなと思っています。
　それと、「真」のところで、自分は暮らしの営みをしていくということには、やはり世代間交流によっての学びは絶対必要だと思っています。ですので、この世代間交流をどのようにしていくかということ、例えばうちの集落では、いろいろな外部の人たちを呼び寄せてのイベントをやりながら、裏方としての集落の人たちが、いろいろな世代間交流をして学ぶ。
　また、学びながら、それを改善したり、改良していかなくてはいけない。それには、や

はりいろいろなところの情報を得ながら改良していくなどをやっていって、そうすることによって、永遠と何百年も先へ、小滝の場合は、300年先へ集落をつなぐという目標を持っているのですが、そういう営みをしていくことが大事ではないかと思います。

それと、うちの場合は、集落の維持活動というものがあるのですが、そういう活動をすることによって、これもまた世代間交流によって、知恵と技を学びながら、それをまた改良して、やりやすくしていくという、まさに暮らしの営みを続けていくということは、生涯学習に尽きるのではないかと、自分のところの地域性だとそういうことがとても必要であるし、求められます。

そして、面白くなくてはいけない。面白くなくて、義務感ややらされている感があったら絶対学びなどはないので、そうではなく、世代間交流をやっていって、疑問や課題を持ちながら解決する喜びや楽しさを感じながらやっていくということが、学びや生涯学習ではないかと思います。それは自分の信念ですけれども、そういうことだと思うと、今日何も知識がない中でこの三つの「シン」を皆さんといろいろお話しさせていただいて、とても明るい気持ちになってきました。まさに自分がしっくり来た今日の会議だったと思って、自分は大きな丸です。

〇毛受委員

「信」のところですが、やはり誘い、誘われるという目線を学びの中につくらないといけないので、例えば、私は子供たちにサマーセミナーをやるのですが、自分たちで「何々を学ぼう」みたいな学ぶ講座を自分でつくります。そうすると、誘わないと人は来ません。誘うから、誘うときにコミュニティーができるわけです。誘い誘われるみたいな。ですので、誘い誘われるような生涯学習を仕掛けていくということをやると、結果的に今日言っていた分断を超えていくので、そういった視点を入れるといいと思いました。

〇泉山委員

一番思うのは、「新」のところについてです。「真」のところとも関係しますが、デジタルでの情報発信とかそういうところが一番今、若い世代や子育て世代を生涯学習につなげるためには、かなり重要なのかなと私は思います。

やはりその世代間交流をするためにも、若い世代を連れてくるためにも、インターネットなどで情報発信をするのが一番で、若い世代に活動してもらったり、来てもらうきっかけになったりするのは、やはりデジタルだと思います。

〇西会長

もう終了の時間が迫っておりまして、全体のことでどうしてもこの場で言っておきたいということはございますか。意見を出していただくシートも用意されておりますので、そこに十分がっつり書き込んでいただいてもいいと思います。

本当にオンラインや対面で御参加の皆様の御意見をたくさん頂戴できたことを大変ありがたいと思います。今、申し上げましたように、言い足りないことや後から発言いただいたことで、補足でこういったこともあるということがあれば、お手元にお配りしております意見記入シートのほうに御記入いただいて、後日、事務局に提出していただければ、今

日の会議内容と含めて反映してまいりたいと思います。今日の意見と意見シートを含めて、事務局とともに提言書の原案の作成へと移ってまいりたいと思います。

次回の審議会に皆様にお示しして、さらに御議論を深めていただければと思いますが、そういった段取りでよろしいでしょうか。

以上で本日の審議を終了いたしますので、進行を事務局へお返ししたいと思います。よろしくお願いいたします。

４　内堀教育長御礼

熱い議論を本当にありがとうございました。聞いていて、いちいちうなずいて感銘を受けながら聞いておりました。

時間もないですので、幾つか感じたところがありますが、絞って感想を言いたいと思います。

その前に、例えば、村や町が一緒になってやっていただいている公営塾ですけれども、白馬以外には、阿智高校、軽井沢高校、阿南高校などが、その地域の力を借りながら公営塾を運営しておりますし、そういう形でなくても、いろいろな形で支援をいただいているところです。また、県立高校の施設の中に様々なものがあるというのは、実は県立学校学習空間デザイン検討委員会の中で、市町村の施設の共用や共同利用みたいなものが書かれておりますので、また御覧いただければと思います。

御議論を伺っていて少し思ったところですが、価値観や人生をどう生きていきたいかということについては、非常に多様化していると思います。その多様化というのは、今だから出てきたというよりは、もともと多様に生きたいと思っていたけれども、例えば社会の同調圧力や常識といったものが強くて、そう生きられない部分もあったのではないかと考えているところです。

ですので、この一人一人の価値観や人生を、こうありたいという、その多様化に対応した、そうしたものを包み込むような社会が大事だと思います。そのためには、例えば一つの施設で全ての方をクリアしていくということではなく、こうありたい、こう生きたい、こう学びたいという人たちが共につくることも大事ですし、あるいはその選択肢があるということが大事ではないかと思います。自分が真に充実感を味わえるということが、ウェルビーイングにつながっていくのではないかというのが１点です。

二つ目は、大人は学び終えた人ではないという文章が、今日御提案いただいた中にありました。学校教育においても、これまではとかく教員が生徒に一方的に教える、知識を注入するという形が多く取られてきた傾向があったのですが、これから教員も学校の役割も、共に学ぶということが必要ですし、そもそも論で言えば、完全な人など世の中には存在しないわけで、ということは、不完全な人が不完全な人に教えていることを考えれば、どうやっても共に学ぶ、共に創るということが必要になってくるのではないかと思います。途上にある人間同士がどうあるべきかということを考えても、学校も、そういう要素が必要なのではないかと考えているところです。

持続可能な地域社会という言葉がありますけれども、今般の高校改革の中でも、学校ごとや地域ごとに「共学共創コンソーシアム」、共に学び、共に創るコンソーシアムという

ものをつくっていきたいという思いが県教委にはあります。その共学共創コンソーシアムというのは、これまで個々の教員や学校長のつながりにおいて、学校ごとにつくっていた、そういう地域とのつながりを、できれば地域の側が中心になって、共に学び、共に創るものを、高校生や中学生、小学生、大学生、企業人等を一緒にして、そういう場ができるといいなと思っています。今、そういったことを念頭に考えているのですが、その生涯学習や社会教育の分野でも同じような議論がなされていたので、汎用性がある話になり得ると感じたところです。

三つ目は、学びは個別的なものというお話がありましたけれども、「参考」の資料として「次期長野県教育振興基本計画について」という資料を御用意させていただきましたが、その裏面で第１回の有識者会議の中で県教委から説明事項として、「長野県が目指す学びの改革（『探究』を中核とした新たな学校づくり）」という話をさせていただきました。長野県においては、今般の学習指導要領で探究ということが正式に学びの中に取り入れられてきたわけですが、それ以前から探究活動や個々の興味関心に応じた学びを大事にしてきた、そういう伝統もありますし、先進的な学校で取り入れたものを共用しながら、小中高で探究に取り組んできたという経緯がございます。

探究をよりよいものにしていくためには、やはり生徒が、自分の興味関心、一番探究したいことを探究するということが大事なことであって、その探究したいことを探究できる、その喜びを感じることが、これは会議の中でも出てきましたけれども、生涯学習につながっていくと考えているところです。

個別の興味関心に応じてテーマや探究の問いを設定したとしても、探究を続けていけば、結局誰かや社会とつながり、その枠が広がっていく。それが大事なことだと思います。意図的に社会とつなげるということも大事なことかもしれませんが、結果的に個人から発した探究の学びが、探究を追求することによって社会とつながることが大事だと考えているところであります。

いずれにしましても、本当に御熱心な議論をしていただき、私自身は初めて参加させていただいたわけですけれども、個人的には非常に参考になるところが多く、また参考にさせていただきたいと感じたところであります。ありがとうございました。

５　その他

○事務局（後藤主任指導主事）

【今後の予定についての説明】

６　閉会

○事務局（増尾課長補佐兼総務係長）